季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

P2　大学図書館の薄闇の中で　長島　弘明

P3　図書館と私　小澤裕紀子

P4　図書館という夢の国　加藤木綿美

P5～6　私と二松学舎大学附属図書館　長谷川日出世　／
図書館と私と…　土屋　茂　／
The War on Truth　A.R. ファルヴォ（【大意】　金子　智香）

P7～8　新入生にお薦めの本　市來津由彦　／　沖森　卓也　／
谷島　貫太　／　今井　悠人

P9　ALA 年次総会訪問記　山崎　和正

P10～11　本学創立者の遊学の地を訪ねて　髙柳　幸雄　／
渋沢栄一と二松学舎　／
書評キャンパス　いまどきの大学生　解体新書

P12　本学教職員著書紹介

No.107

2020（令和２）年３月

大学図書館の薄闇の中で

文学部国文学科　特別招聘教授　長島　弘明

私は四年生で仏文から転科してあわてて卒論を書いたため、学部時代は古典作品の原本などというものは見たことがなかった。大学院に入り、専門と決めた近世文学の原本くらいは見なければと思い、四月のある日、図書館の書庫に入った。当時の東大図書館では、大学院生は貸し出しカウンターに学生証を預ければ、書庫の中に入り自由に本を手に取って見ることができたのである。それも活字本だけではない。東大図書館では、とびきりの貴重本以外は、近代以前の日本の古典籍（和本という）であっても、活字本と同じようにごく普通に書架に立てて並べられていた。立てて並べるためと、散逸を防ぐためであろう、和本の中には、ボール紙表紙を付けられて無理矢理一つに綴じられてしまっている哀れなものも多かった。それらの和本は、ありがたいことに借り出しもできたのである。

当時の書庫の中は薄暗い蛍光灯のみで、棚の下の方などは書名もよく見えない所があった。そういう薄闇の中の棚を順に目で追っていくと、「諸道聞耳世間猿（しょどうききみみせけんざる）」という文字が目に入った。研究対象に選んでいた上田秋成の作品だった。ボール紙製の帙（ちつ）もかなり痛んでいたが、それが心なしか微光を放って薄明るく見えたような記憶があるのは、自分が探していた本にめぐり会った心踊りのせいだったろうか。帙の中の本も美本ではなく、元々五冊の本が一冊に綴じ直され、替表紙に手書きの題簽が貼られていた。刊記もなかった。かなりくたびれた印象の本だったが、表紙の見返しには元題簽が五枚とも丁寧に貼ってあった。私は初めて和本を借り出し、用意してきた風呂敷に包んでカバンに入れた。帰宅の道では、こわれものを運んでいるようにカバンをしっかり抱えて歩いた。

下宿に着くと、本をめくりながら一丁ずつ丁寧に見ていった。所々破れたり、虫に食われたりしており、特に挿絵はいたずら書きがあちこちにあった。しかし、文字はくっきりと印刷されており、素人目にも刷りはずいぶんいいように思われた。版本は何度も刷られるという程度の知識はあったから、この本が何回目に刷られた本なのか調べてみようとその時思い立った。それが私の書誌学的研究の始まりである。その後、修士論文を仕上げるまでに、『諸道聞耳世間猿』三十数部を調べ、版種が十種（さらに細分化すれば十五種）に及ぶこと、初版は正本屋清兵衛単独版であることなどを明らかにした。この東大図書館本は、刊記がなくなっているものの、初版初刷本だったのである。

余談ながら、この東大図書館本の三之巻一の挿絵には、主人公の武術好きの尼が長刀を持った図が描かれているが、剃髪してあるはずの尼の頭には、いたずら書きによってちょんまげが書き加えられている。いたずら書きをする人間の心理は似ているようで、東大国文研究室の『諸道聞耳世間猿』の挿絵にも、同様にちょんまげがある。東大図書館本も国文研究室本も、ともになかなかうまい加筆で、私は最初はだまされて見過ごしてしまった。だまされた人は他にもいるようで、藤村作編『日本文学大辞典』第二巻（新潮社、昭和八年）の「諸道聞耳世間猿」の項には、まさに東大国文研究室本の三之巻一の挿絵が麗々しく掲載されている。そんなことに気づいて、独りにやにやしたこともあった。

それ以後、私はしばしば図書館の書庫に籠るようになった。机もない書庫の中で、たったひとり立ちながら和本をめくる時間は至福の時間であった。そうやって出会った和本は何百冊、あるいは何千冊になるだろう。私の研究は、図書館の書庫の薄暗い片隅から始まったのである。

図書館と私

国際政治経済学部国際政治経済学科　特別任用准教授　小澤裕紀子

図書館は、私にとって大切な場所だ。大学に入学して真っ先に向かったのも図書館である。毎日1限に間に合うよう自宅から2時間かけて通っていた私は、空き時間は必ず図書館で過ごした。図書館にいると心が安らぎ、書庫を歩き本を手に取ると胸が高鳴った。

図書館は本との出会いのみならず、親友という一番大切なものも与えてくれた。入学から間もなく、毎日、図書館で見かけるクラスメートがいることに気づいた。これをきっかけに親友になった。まだSNSなどない時代、「友達」の重みは今とは全く違う。二人とも真面目に学生生活を送っていたので、その点でとても気が合った。彼女の部屋の本棚には全集物がびっしりと並び、実に壮観であった。正真正銘の本の虫。彼女の博覧強記ぶりを私は心から尊敬していた。

さて、科目一覧を見ていると「図書館学」という文字が目に飛び込んできた。図書館が学問の対象になっていると知り、喜び勇んで受講した。詳細は遥か忘却の彼方だが、確か図書館の目的、使命、歴史、分類法等々を教わったと記憶している。学びながら、司書という仕事にも興味を惹かれた。ある日、家に帰ると筆箱がない。翌日、図書館に向かうと、何と入り口のカウンターで名前を呼ばれ、「お忘れでしたよ。」と司書さんが私の筆箱を差し出して下さった。中に名前が書いてあったとはいえ、大変びっくりし感激した。司書さんは、本だけでなく学生のこともよく見て下さっていたのだ。

大学で英文学を専攻していた私は、ジェイン・オースティン（1775-1817）を題材に卒論、修論を書いた。夏目漱石が「写実の泰斗」と称賛した小説家である。指導教官は、Oxford English Dictionary（OED）を引くよう指導なさり、細かく質問なさった。OEDは英語で書かれた世界最大の国語辞典（英英辞典）だ。百科事典並のボリュームで当時、全13冊（うち補遺版1冊）だった。図書館でOEDを引く。一語引くたびに本棚から該当の1冊（約3.6kg）を取り出しては戻す。辞書引きも肉体労働だった。言葉は時々刻々と変化している。例えば、今は主に男性に対し使うhandsomeという単語も、オースティンの作品では女性に対しても普通に使われていたりする。それで、通時的記述に優れているOEDが必要なのである。私は13冊を2冊に縮小印刷した縮刷版を買って貰うことにした。丸善まで父が同行し、虫眼鏡付きの重たいOEDを持ってくれたのを今でも懐かしく思い出す。

夫の研究の為、ニューヨークのマンハッタンで暮らした際には、夫が大学にいる日中は専ら、ニューヨーク公共図書館で過ごした。しかし、トイレが犯罪の温床になるという理由で何と閉鎖されていたのである！どうしたか。一々、喫茶店に入って借りたのだが、どの店にも最低料金が設定されていて、必ずその金額以上の注文をしなくてはいけない。ニューヨークの治安が最悪だった頃の話である。

大手の英会話学校で講師をしていた頃は、出講先のスクール最寄りの区立図書館を訪ね歩いたものだ。元職場だった大学の伝統ある総合図書館。天井が高くシャンデリアのある閲覧室が大のお気に入りだった。ここでも親友を得た。紙面の都合上、割愛するが、図書館にまつわる思い出話は尽きない。

先日、世界の美しい図書館という記事をネットで読み、心を奪われた。図書館自体が見事な芸術作品なのだ。いつか世界の図書館巡りをしてみたいと夢見た。どなたか旅行会社に就職したら、そんなツアーを紹介して頂けないだろうか。そしてもう一つ。昨今はアルバイトで忙しく図書館に行く暇もないという学生さんも多いようだ。又、参考文献を書いてもらうと、ネット検索が圧倒的に多い。しかし、忙しいからこそ図書館を訪ね、本を手に取ってみてはどうだろう。書庫を歩くだけでも、ぼーっとするだけでもいい。きっと心がほぐれ、何かを得られるはずだ。知の宝庫である図書館で過ごす。これは学生の特権なのだから。

ニューヨーク近代美術館にて

図書館という夢の国

国際政治経済学部国際経営学科　専任講師　加藤木綿美

私の生まれは秋田県という東北の町で、東京のように多くの娯楽施設にあふれているわけではなく、一年の半分くらいは雪が積もっている町であったため、私にとって娯楽の中心を占めているのは本だった。

私が住んでいたのは秋田市の中心地で、秋田県の中では栄えているエリアだったため、子どもが自転車で行ける圏内に、秋田市中央図書館明徳館と、秋田県立図書館という 2 つの大きな図書館が位置していた。

小学生の時は、母と姉と 3 人で出かけて、キャッスルベーカリーというパン屋さんでジャムパンを買い、明徳館の休憩スペースで食べては、本をたっぷりと読み、厳選に厳選を重ねた本を一人 5 冊ずつ選んで借りて帰るというのが習慣だった（父から頼まれた釣りの本も忘れずに借りた）。

小学生の頃は、何らかの分野に突然ハマり、その分野の本ばかり読むという習慣があったように思う。ある時はなぜか盲導犬の本にハマり、図書館にある全ての盲導犬の本を読んだ（私は犬が特別好きなわけではなく、身近に視覚障害者の知人がいたわけでもない）。次にピルブックにハマり、ありとあらゆる薬の本を読んだ（私の身近に大病を患った人や薬剤師の仕事に従事する人がいたわけでもない）。またある時は相対性理論の本にハマった（結局のところ相対性理論を理解するのは難しいという結論に至った）。

中学生のある時から、明徳館で読みたい本はあらかた読んでしまったため、今度は秋田県立図書館に通うようになった。県立図書館では当時、一人 7 冊の本を借りることができた。私は母の図書カードと姉の図書カードを借りて 21 冊の本を借りては、ものの数日で読み終わり、また 21 冊を借りてくるということを中学・高校の日々繰り返していた。

そしてある時から現代小説にハマり、著者名の「あ」の棚から順繰りに目についた読みたい本を全て読んでいくということを始めた。今考えると膨大な時間を要したように思うが、最後の「わ」にたどり着いたときには達成感を感じたものだった。そして、そんなことをやっている人間は私くらいのものだろうと思っていたが、東大に入学してからすぐ、中学時代に全く同じことをしていた後輩に出会った。その後輩は今や私が最も信頼する親友の一人になっている。

図書館はいつ行っても夏は涼しく冬は温かく、静かで、座り心地の良いソファーがあり、読み切れないほどの本があり、インターネットも使える（私の実家には当時も現在もインターネットがない）。私にとってはまさに夢の国であった。「今、どこでもドアがあって、ディズニーランドに行きたいか、秋田県立図書館に行きたいか」と問われれば、私は迷わず後者を選ぶだろう。

私は大学進学をきっかけに関東へ移り住んでから、東京の住みやすさに愛着を持っており、東京という町が大好きだが、唯一図書館にだけは不満を持っている。東京の図書館はいつも混雑していて、人気の本はいつも借りられているからだ。そのため、東京の子どもたちは少しかわいそうだと思うことがある。

外に降り積もる雪を眺めながら、温かい部屋で本を読む。私にとって、夢の国で好きなだけ本と暮らしたあの日々は、何物にも代えがたい大切な思い出になっている。

私と二松学舎大学附属図書館

国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　長谷川日出世

昭和 63 年４月、二松学舎大学文学部専任講師として採用されて以来 32 年がたちました。それ以前に２年間、非常勤講師を務めましたので計 34 年間の二松学舎での教員生活となります。

二松学舎に勤務して最初に驚いたのは、図書館の存在でした。九段の旧図書館に一歩入ると、セピア調の色彩の中、書架に並んでいる書籍はあらかた文学（日本文学、中国文学）関係のものでした。私のような社会科学系等の学部出身者にとっては、大変な驚きであると同時に、ある意味、異次元の世界に迷い込んだような錯覚にさえ捉われたことを、今でも覚えています。その後、柏校舎に国際政治経済学部が開設され、それと同時に柏新図書館が設けられました。この新図書館には、従来柏校舎で授業が行われていた文学部１，２年生のための書籍と新学部である国際政治経済学部の学生のための書籍が収蔵され、これにより所蔵の図書数はともかく対外的にも恥ずかしくない体裁が整えられました。また平成 16 年の九段校舎の建て替えに伴い、１号館地下に新図書館が開設され、すべての面で一新された現代的設備を有するものとなりました。

私事で恐縮ですが、平成 21 年から２年間図書館長を務めさせて頂きました。その際に腐心したのは、いかに多くの学生に利用してもらえるか、あるいはもらうかの一事でした。現在は、その後の歴代の館長並びに職員の方々のご努力により、利便性の大きな改善が図られているように思われます。

今後、学生諸君が図書館を益々積極的に利用され、自己の研鑽に努められんことをお祈りいたします。

図書館と私と…

国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　土屋　茂

平成５年３月１日、二松学舎大学国際政治経済学部沼南キャンパス（現柏キャンパス）に赴任した。辞令は九段キャンパスで交付されたが、翌日沼南キャンパスへ向かった。柏駅からはタクシーで（当時教員にはタクシー券が渡されていた。後廃止される）、沼南キャンパスに着き、２号館５階の研究室に案内された。数日は本の整理等を行ない、一段落したところで図書館を見学した。国際政経関係特に法律関係の書籍・雑誌がどのくらいあるか確認したかった。結果あまりの少なさに驚き、まず法律系の専門雑誌の購入を依頼した。ちなみに本・雑誌ともに私個人の所有の方が多かったと記憶している。書籍も図書館職員の方の努力により増えていった。授業の教材作りに図書館を大いに利用していたが、図書館全体の事は考えてもいなかった。それが大学における図書委員も経験せずに、いきなり図書館長をすることになった。困ったことになったが、前館長の谷口先生より引継に関する説明を受け、全体的な流れを把握することができ図書館の職員の方にも助けていただき、２期４年の館長職を無事に終えることができた。利用するだけの立場から図書館を運営する側になると、二松学舎大学における図書館の現状を知ることになり、何とか改善をしようと努力したが、根本的な改革はできなかった。残念な思いを今も持っている。退職後も時々利用しようと考えているが、現実にはどうなるか未定である。九段図書館だけでなく、柏図書館にも行きたい。

The War on Truth

国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　Ａ．Ｒ．ファルヴォ

The conceptual notion of War has been a banner of concern for more than one United States president. For Lyndon Johnson, it was the *War on Poverty*. For Richard Nixon, it was the *War on Drugs*. For George W. Bush, it was the *War on Terrorism*. But what concerns most Americans today is Donald J. Trump and his *War on Truth*. Information has become the greatest victim of the *War on Truth* by the current president of the United States. Right from the start, reaction to both the crowd size at the inaugural ceremony and the greater numbers of votes by over three million citizens for Hillary Clinton in the 2016 Presidential election laid the groundwork for an administration founded on deception, subterfuge and blatant lies. This war on the truth is unparalleled in history. It also rivals such deceptive and suppressive activities of Hitler's book burnings and practices of his Minister of Propaganda Joseph Goebbels to hide the extermination of more than six million Jews and the concentration camps where they were held. Ironically, although not to the degree of the death camps of the holocaust, these activities harken back to the cages in migrant detention camps established in 2018, in which children and refugees from repressive governments of Guatemala, Honduras and El Salvador have been held at the U.S. - Mexico border. Many of the cult like members of the Trump administration's supporters in Congress took great umbrage when comparisons to Hitler's concentration camps were made by the opposition party (the Democrats).

The most effective weapons to wage Trump's *War on Truth* have been various forms of social media, the internet and various cable

news sources. Specifically, Twitter, Facebook and Instagram have become the most convenient and effective vehicles to attack the truth through misinformation, distraction and gaslighting in the forms of micro targeting, spear phishing, as well as the use of bots and trolls. On other media levels, questionable blogs and entries in Wikipedia call its integrity into question. In response to these attacks on the truth, Google and Twitter have made efforts to review and block fake news entries. Rather than adopting these monitoring strategies, Facebook requires users to decide for themselves whether to accept the validity of the posts. Unfortunately, consumers of information in social media or on cable news sources blindly follow only information sources based on their preconceived notions of the truth. This is known as cognitive bias. In the most extreme cases, they believe that if it is on the Internet, it must be true - regardless if it is from a reputable news agency or simply from a blog, a bot, a troll farm, micro targeting or spear phishing.

Recently, FBI director Christopher Wray has addressed this issue of cognitive bias. Following the release of the Department of Justice's questionable statements regarding the Trump Administration's manipulative actions in the Ukraine, he responded, “It’s important for the American people to be thoughtful consumers of information, to think about the sources of it and to think about the support and predication for what they hear.”

Simply stated, Director Wray said, "Don't believe everything you hear or read.", In stark contrast to this warning against fake news, Trump has said, 'What you're seeing and what you're reading is not what's happening' chanting the usual mantra, *fake news* when the veracity of his statements are called into question. The Orwellian similarities are stunning.

It is more than tragic that the Trump administration, through its actions, has enabled countless public officials to propagate fake news and so-called alternative facts in public hearings, in interviews or in social media. In contrast, officials at the Environmental protections Agency were prohibited from releasing empirical scientific evidence on global climate change under the strict orders of the White House. In another instance, the White House used a black marker pen in a clumsy attempt to change the path of a hurricane on a map issued by the National Oceanic and Atmospheric Administration. The reason simply was to match the map to an erroneous statement Trump made publicly. In the most sinister case, witnessed were ordered to ignore authorized subpoenas to appear at the congressional Judiciary and Intelligence committee hearings on the Ukraine arms funding scandal. Those witnesses who dared to defy the White House efforts to suppress sworn testimony became victims of brazen witness tampering.

By the latest count of reputable fact-finding sources, the White House has chalked up more than 15,000 lies. The refusal of all but one Republican in Congress to dispute these lies, begs the question of whether this extreme partisanship should not be considered an outright cult. Rather than referring to Republicans by name, many political commentators now regularly referred to the Trump supporters as *Cult 45* since Trump is the 45th president of the United States. Consequently, the tribal nature of politics in contemporary American society calls into question the legitimacy of holding a fair and unbiased Senate hearing to review the Articles of Impeachment forthcoming from the House of Representatives.

In a recent example of this tribal political behavior, one member of the House of Representatives was emboldened into posting a deceptively edited photograph of former President Obama shaking hands with the Iranian President Rouhani with the caption, "The world is a better place without these guys in power." In fact, the photo was taken in 2011 with Indian Prime Minister Manmohan Singh. The congressman in cult like obedience to President Trump, has refused to apologize or retract the grievous false post. Such manipulations of fact and truth must be categorically rejected. Unfortunately, the political and media world in Washington is currently in a crisis of confidence to call out such lies and deception. Failure to do so will lead to a post Orwellian dystopian society making the novel *1984* pale in comparison.

In summary, students must develop and exercise critical thinking skills to recognize, challenge and reject misinformation, disinformation, distraction, deflection, hysterical rhetoric, subversive media sabotage and all other forms of fake news and so-called alternative facts that wage war on the truth.

【大意】

アメリカ合衆国大統領は様々な戦いに挑んできた。リンドン・ジョンソンは貧困、リチャード・ニクソンは麻薬、ジョージ・W・ブッシュはテロリズム、そして、現大統領のドナルド・J・トランプは真実。現大統領の「真実への戦い」において、情報は恰好の餌食となっている。トランプ政権は、ごまかし、言い訳、露骨な嘘に満ちている。トランプ政権の「真実への戦い」は、情報を歪めることであり、このようなことは過去に類を見ない。

トランプ政権の「真実への戦い」に対抗するには、ソーシャルメディア、インターネット、ケーブルニュースが有効である。それらの利用者はそこで得る情報の妥当性を判断しなければならない。連邦捜査局長官は、トランプ大統領のウクライナ疑惑の際に、情報の出所を確認する必要性に言及し、聞いたり読んだりするすべてのものを信じてはいけないと注意を促している。

今や 15000 以上にものぼるトランプ政権の嘘が明るみになっている。現在、ワシントンの政治とメディアの世界は危機的状況にある。何もしなければ、ジョージ・オーウェルが「1984 年」という小説で描いたような、政府が市民の自由を奪う全体主義社会になってしまうだろう。

学生の皆さん、批判的思考力を身に付けてください。虚偽の情報、故意による誤報、理性を欠いた言動表現、メディアの妨害行為など、これらを認識し、疑い、拒絶してください。そして真実を見極める目を養ってください。

（【大意】作成　国際政治経済学部国際政治経済学科　准教授　金子智香）

新入生にお薦めの本

（価格はすべて税込、2020年2月現在）

文学部中国文学科　特別招聘教授 市來津由彦

①『東洋文庫ガイドブック』

編　者：平凡社東洋文庫編集部編
発行所：平凡社　2002 年

何かお腹にたまる内容ある本、しかし長すぎないものをのんびり読みたい新入生にお勧めするのが、硬軟取りまぜてのアジア関係原典面白本どっさりの「東洋文庫」シリーズ、約一千点（19 年現在）。本書は、研究者を中心に作家、文筆家らが、この東洋文庫に入るお好きな本について、それぞれの視点から知的好奇心をあおるエッセイ集。当該本を読んでみたいと思わせる各著者の語り口が味わい深い。同『ガイドブック 2』（2006 年）もある。

②『訓読から見なおす東アジア　東アジア海域に漕ぎだす５』

編　者：中村春作　監　修：小島　毅　発行所：東京大学出版会　2014 年　3,300 円

持続する中国文化を創造、保持し続けたのは、漢字・漢文（中国古典文）である。その中国の漢文文化の消化を通し、東アジア各社会は自文化を構築してきた。こうみた場合、訓読技法は多様にあるこの消化の技法の一形態として客観化して語ることができる。「訓読」を文化論的な広い視座から捉え直したい人にお薦めしたい。

③『中国絵画入門』（岩波新書1490）

著　者：宇佐美文理
発行所：岩波書店　2014 年　924 円

中国絵画は、毛筆、墨、（和）紙による書芸術の親族的な芸術分野である。中国では古来、「気」を万象万物の構成基体とみなしてきた。西洋絵画と比較するとこの概念が絵画観の相違を醸し出す。本書は、名品解説にとどまらず、「気と形を主題とした中国絵画史」（1 頁）をめざす。引用絵画が小さいのでルーペ必携で楽しまれたい。

文学部国文学科　特別招聘教授 沖森卓也

①『辞書は生きている―国語辞典の最前線』（ほるぷ150ブックス）

著　者：倉島節尚　発行所：ほるぷ出版　1995 年

②『舟を編む』

著　者：三浦しをん
発行所：光文社　2011 年　1,650 円

③『国語辞典の名語釈』（ちくま学芸文庫）

著　者：武藤康史
発行所：筑摩書房　2008 年

何かわからない言葉や事柄について調べたいという時には、辞書はたいへん重宝なものである。現代では紙媒体の辞書を引くことが少なくなっているが、ネットの辞書であっても編集や執筆のしかたは紙媒体に準じている。辞書は、調べる必要が生じたときだけでなく、読書の対象としても読んでもらいたい。未知の事柄や、物事の体系を知ることは知的冒険といってよかろう。加えて、紙媒体の時代において、一冊の辞書を編集するということに執念を燃やした事実を知ることも、またたいへん興味深い。辞書を作る過程を編集者側から記したもの、辞書編集をテーマにして人間模様を描いた小説、その書かれた内容を深く味わう評論的なものをそれぞれ挙げてみた。ある事に没頭し生涯をかけることで得られる喜びは大きいに違いない。あわせて、近代国語辞典の祖である大槻文彦『言海』の「ことばのうみのおくがき」、最大規模の漢和辞典である諸橋轍次『大漢和辞典』の第１巻の序、および第１２巻の跋も一読に値する。その行間は、大部な辞書を独力で編集しえた当事者のみが味わうことのできる、困難を克服したがゆえの栄光に満ちあふれている。

文学部都市文化デザイン学科　専任講師 谷島貫太

①『英語達人列伝―あっぱれ、日本人の英語』(中公新書)

著　者：斎藤兆史　発行所：中央公論新社　2000 年　836 円

②『嘔　吐』

著　者：ジャン＝ポール・サルトル
発行所：人文書院　2010 年　2,090 円

③『勉強の哲学―来たるべきバカのために』

著　者：千葉雅也
発行所：文藝春秋　2017 年　1,540 円

カンフー映画に影響され、階段を三段飛びで駆け上がる。そんな勢いで英語の勉強ができたらすごいと思いませんか？斎藤兆史『英語達人列伝―あっぱれ、日本人の英語』には、カンフーマスターならぬ英語マスターたちがたくさん登場します。読むだけで不思議な万能感がみなぎってきます。その勢いで海外にでも留学しちゃいましょう。ジャン＝ポール・サルトル『嘔吐』、この本は別に読まなくていいです。読んでもいいけど。この小説の中に、図書館でアルファベット順に本を読み進めていくおかしな人たちが出てきます。高校生の時、ぼくはそれを真似したのでした。う行に入る前に力尽きましたが、そのとき読んだ本はやけに印象に残っています。みなさんもやってみたらどうでしょうか。ところでみなさんは何のために勉強をしてきましたか？千葉雅也『勉強の哲学―来たるべきバカのために』では、勉強はバカになるためにするのだと宣言します。たんなるバカではありません。来たるべきバカです。いったいどういうことでしょうか？とりあえず「来たるべきバカ」になってみたい人はぜひ一読を。

国際政治経済学部国際経営学科　専任講師 今井悠人

①『孝経・大学・中庸新釈』

著　者：塩谷　温・諸橋轍次・宇野哲人
発行所：致知出版社　2005 年　6,285 円

②『うひ山ふみ　鈴屋答問録』(岩波文庫)

著　者：本居宣長
発行所：岩波書店　1934 年　572 円

③『國學の本義』

著　者：山田孝雄
発行所：畝傍書房　1942 年

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本学は漢學の泰斗、中洲三島毅先生が開きました。その舎則に漢學の目的は、「己ヲ治メ人ヲ治メ、一世有用ノ人物トナルニ在リ」、「仁義道德ヲ以テ基本トナササル可ラス」とあります。そのためにまず何を読むべきかというと、孝經から始めて大學、中庸と進むと良いでしょう。原文が口になじむまで親しんだら、藤樹中江先生の孝經啓蒙、大學啓蒙、大學解、中庸解などの注釈を読むのが良い。しかし、それも簡単ではない。その場合には西晋一郎先生の通釈が最も読みやすく、優れた内容でしょう。さて、確かに漢學は古今東西不朽の倫理学ですが、我が国に於て全ての価値基準としてしまうと諸々の対立があらわれます。では何を学ぶべきかと言うと、國學ということになります。國學が何かということは一言では納められません。まず國學が何かということを知るためには、荷田春滿先生の創造國學校啓（國學の本義所収）があります。その後、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の三先生を代表とする学派が形成されるのも、実にこの啓文の指南の具現化と言えます。そして國學をいかに勉強するかということは本居先生の『うひ山ふみ』に書いてあります。

ALA 年次総会訪問記

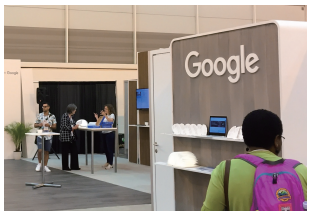
図書館員　山崎和正

筆者は 2018 年 6 月にアメリカ図書館研修として、ニューオリンズとヒューストンの大学・公共図書館を視察する機会を得ました。その模様については「季報」103･104 号で報告したので、今号では ALA 年次総会（ALA Annual Conference and Exhibition）について紹介します。ALA 年次総会とはアメリカ図書館協会（American Library Association）が主催する一大イベントです。利用者サービスから著作権問題、図書館経営まで、多様なテーマを扱った 2,000 件近いフォーラムや、500 以上の企業が出展する大規模な展示会が 6 日間にわたって開催され、アメリカのみならず世界中の図書館関係者が集います。

会場内に一歩足を踏み入れると、世界最大の書誌ユーティリティである OCLC、大手版元である Elsevier や Springer Nature といった図書館界の名だたる企業がひしめきあっています。

各企業が提供する最新の図書館機器を直に触れることができる貴重な機会でもあり、例えば下の左側の写真は約 350 冊の本を収納でき、24 時間受け取り可能な自動貸出機です。右側の写真のブックスキャナーは様々なフォーマットで高画質画像を取り込めて、メールで共有することもでき、実際に訪問した大学図書館にも導入されていました。

Google は教員向けにプログラミング教育の方法を教材として開発したものを展示していて、アメリカの図書館が、IT リテラシー教育に注力していることを伺わせます。



ポスターセッションでは、日本から参加したビジネス支援図書館協議会が「街ゼミ」の活動を紹介していました。「街ゼミ」とは、商店街の店主が講師となってセミナーを開き、その際に図書館が関連資料を提供してサポートする取り組みです。海外の方も興味深そうに耳を傾けていました。

日本のアニメやゲームのブースも多くの人で賑わっていて、海外での日本製コンテンツの人気の高さを実感しました。

フォーラムでは、Hewlett Packard や Microsoft での経歴を持つ Sandra Hirsh 教授の講演を聴講し、テクノロジーと図書館の役割について最新の動向を伺う機会を得ました。教授は図書館を取り巻く現状を、「disruptivie（秩序を壊す）」テクノロジーの変化（IoT, VR, Big data, wearable device 等）と捉え、ライブラリアンは情報のプロとしてユーザーがどう使うのかを考え、「あらゆる情報テクノロジーのハブにならなければならない」という言葉が印象的でした。

本学創立者の遊学の地を訪ねて　図書館事務部長　髙柳幸雄

2019（令和元）年 11 月 21 日（木）～ 22 日（金）、第 105 回全国図書館大会が三重県津市で開催された。津は、本学創立者・三島中洲が 23 歳［1852（嘉永５）年］の時から４年間遊学した地である。中洲は 14 歳で備中松山（岡山県高梁市）の山田方谷（1805 ～ 1877）の牛麓舎に入塾し、23 歳で伊勢津藩（三重県津市）の斎藤拙堂（1797 ～ 1865）に師事し、29 歳で昌平黌（東京都文京区･湯島聖堂）の佐藤一斎（1772 ～ 1859）に従学した。

①有造館跡

全国図書館大会は午後開始となっていたので、午前中は津市内の中洲ゆかりの地を巡った。初めに津新町駅から東へ徒歩 15 分ほどの藩校有造館跡を訪ねた。現在は「史跡 津藩藩校 有造館跡」と記された石柱が建つのみである（写真①）。有造館は、1820（文政３）年に第 10 代藩主の藤堂高兌（たかさわ）が創設し、1871（明治４）年まで藩士やその子弟を教育した藩校である。伊勢津藩士ではない中洲は、この藩校では学ぶことはできず、斎藤拙堂の教えを津城北郊の山荘で受けている。拙堂は、頼山陽と幕末の文名を二分する人物である。中洲は藩校蔵書の取扱役であった伊勢津藩士・川北梅山（1822 ～ 1905）の計らいにより、藩校の図書閲覧を許された。梅山は伊勢津の出生、斎藤拙堂の門に入り、のちに津藩の督学となった人物である。生涯を通じ中洲とは詩文の交わりがあった。

②入徳門

次に津城跡を訪ねた。そこにはかつて有造館講堂の正門にあった入徳門（写真②）が移築されていた。

城跡を後にして、津駅近くの津偕楽公園へ向かう。40 分ほど歩いて公園の東側入口から坂を上り、小高い丘の上に出ると広場があり、その右手奥に碑が建っていた。近づいて篆額を見ると、正しくこの碑は、「拙堂斎藤先生碑」であった（写真③）。碑文に「受業弟子宮中顧問官従三位勲一等文學博士三島中洲謹撰」とある。この碑は拙堂没後 50 年忌に建立されたもので、当初撰文は土井聲牙（こうが）（1818 ～ 1880）が指名されていたが、すでにこの世になく、かつて中洲に従学した拙堂の嫡孫・正彰が中洲に依頼したものである。「余の学半ば津藩に成る」と述懐している中洲にとって、この依頼は大変意気に感じ、撰文したものと想像される。碑の建立は 1916（大正５）年、中洲 87 歳であった。この墓碑銘は「中洲文稿第四集 二」に収録されている。しばし碑を堪能し、全国図書館大会会場の総合文化センターへと向かった。

③拙堂斎藤先生碑

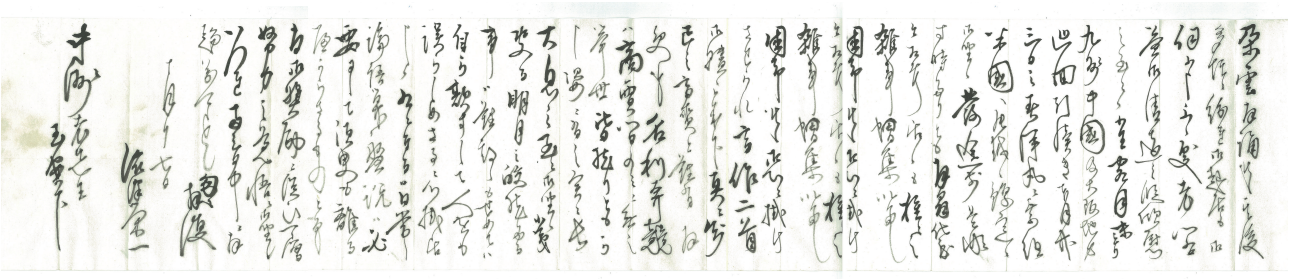
平成から令和へと新時代を迎えた 2019 年は、１月に東京･湯島聖堂で開催された本学同窓・深澤賢治氏による講演会「佐藤一斎の人間性」を聴講し、２月に山田方谷記念館の開館記念式典参列のため、岡山県高梁市を訪れた。その記念館の館長には本学同窓・山田方谷玄孫の山田敦氏が就任された。そしてこの度、全国図書館大会参加のため、三重県津市を訪れ、期せずして若き日の創立者が学問研鑽した地を訪れた１年となった。寄しくも中洲没後 100 年の年にあたった。

渋沢栄一と二松学舎

2024 年に紙幣が刷新されることとなり、新紙幣の１万円札の肖像となる日本資本主義の父と称される渋沢栄一（1840 ～ 1931）と本学は深い関係にあります。

それは、本学創立者・三島中洲（1831 ～ 1919）との縁です。1883（明治 16）年に渋沢が前室宝光院（俗名千代）の碑銘を中洲に依頼し、出来上がった撰文にいたく感銘したのが始まりです。また、渋沢は、「論語」の倫理思想を現代的に解釈し、「道徳経済合一説」を説き続けました。これが中洲の思想と符合し、次第に親交が深まっていきます。1919（大正８）年５月に中洲が他界した後、同年 10 月に二松学舎第三代舎長に就任し、手腕を振るい、1928（昭和３）年には本学を漢学塾から二松学舎専門学校へと新しい道へと導きました。

本学所蔵の渋沢栄一書翰「1915（大正４）年 10 月 17 日付の三島中洲宛」を紹介します。



読み下し：朶雲拝誦つかまつり候。その後多忙に紛れ、ご起居もお伺い申し上げず候ところ、老閣ますますご清適の段、欣慰の至りに候。小生、客月末より九州中国および大阪地方巡回、引き続き本月廿三日の春洋丸に乗り組み、米国へ罷り越し候予定にござ候。発途前、ぜひ寸時たりとも拝眉つかまつりたしと相考へ居り候も、種々の雑事蝟集いたし、困却つかまつり候。お心に掛けさせられ、高作二首お贐成し下され、真に知己の高賚とありがたく拝受つかまつり候。名利奔競は商賈間のみにこれなく、挙世皆然りとも申すべき姿にこれあり、実に長大息の至りにござ候。小儀、決して明月の皎然たる事は期し難く候も、せめては自ら欺ずして、人をも誤らしめざるに心がけ居り申し候。右に付いては、日常「論語算盤説」は必要にして須臾も離るべからざるものと存じ候。なほご奨励に従ひ、一層努力の覚悟にござ候。いづれ両三日中に拝趨、万申し上ぐべく候。匆々拝復。

十月十七日　渋沢栄一

中洲老先生玉案下

（『三島中洲と近代―其二』より）

書評キャンパス　いまどきの大学生 解体新書

千代田区立千代田図書館と千代田区内の大学との連携事業として「書評キャンパス」が、「週刊読書人」の協力のもと行われました。この「書評キャンパス」は、大学生が新刊書などの内容を紹介し、また批評する企画です。本学から８名の学生が挑戦し、「週刊読書人」の編集者と推敲を重ね、書評を書き上げました。その書評は、「書評キャンパス いまどきの大学生 解体新書」として、千代田図書館 9F の展示ウォールにおいて、3 期に分けて千代田区内の他大学の学生と共に展示されました。本学学生の書評は次のとおりです。

［第１期：8/26 ～ 9/21］　石川桂子編『竹久夢二詩画集』　文学部国文学科１年　近藤里咲

メアリー・マッカーシー著『私のカトリック少女時代』文学部中国文学科４年　宮下洋平

［第２期：9/23 ～ 10/26］岸政彦著『断片的なものの社会学』文学部国文学科３年　長坂琴音

長嶋有著『新装版　春のお辞儀』国際政治経済学部国際政治経済学科３年　郡司和斗

荒井裕樹著『差別されてる自覚はあるか 横田弘と青い芝の会「行動綱領」』文学部国文学科３年　初芝里帆

［第３期：10/28 ～ 11/23］村田沙耶香著『マウス』文学部国文学科１年　米山あさみ

くどうれいん著『わたしを空腹にしないほうがいい』文学部国文学科４年　近藤怜香

羽田圭介著『コンテクスト・オブ・ザ・デッド』文学部国文学科４年　上田彩香

書評に、本学附属沼南（現・柏）高校卒業生の芥川賞作家・村田沙耶香氏の作品や本学文学部の荒井裕樹准教授の作品が取り上げられています。

この展示とは別に「週刊読書人」に、8 月 23 日付で 1 年近藤里咲、9 月 20 日付で 3 年郡司和斗、10 月 25 日付で 4 年宮下洋平、11 月 22 日付で 3 年初芝里帆、2 月 14 日付で 4 年近藤怜香の 5 人が掲載されました。

今回の書評で取り上げられたブックリストを見ると、伊坂幸太郎や三浦しおんなどの現代作家、高村光太郎のような近代の詩人、トニ・モリスンのようなアメリカ現代文学の巨匠・ノーベル賞作家など、他大学の学生からも幅広く紹介されていて、興味をそそられます。書評で取り上げられた作品を一度手に取られてみてはいかがでしょう。

書評キャンパス　第１期の様子

本学教職員著書紹介

『アメリカ合衆国憲法における連邦制度と裁判（対人）管轄権訴訟』

河原田有一 著
（信山社　2019 年 7 月 30 日発行）
B6 変版　255 頁・8,000 円＋税
ISBN : 9784797285734

このたび、出身大学の慶應義塾大学法学会の厳格なる審査を経て、出版助成金を獲得することができたことにより、念願であった、私の四十数年間の研究成果を単著として刊行することができた。

私の研究はアメリカ合衆国の独自の連邦制度の下における州の裁判管轄権を他州に行使できるかどうかである。この争点は 19 世紀の初頭からアメリカ合衆国憲法の連邦制度に基づいて、民事訴訟において、必然的に生じたものである。各州は独立国家に近い状態にあることから、自からが居住する州において他州の人を訴えるためには、被告として何んらかの訴訟原因に結びつく行為を原告の居住する州において行っていなければならない。その行為の存在は単なる物理的、名目的存在だけでなくどのような意図をもっておこなわれているかどうかが、重要な分岐点となっている。

この行為は単にコンタクトと呼称されているが、このコンタクトの存在をめぐって 19 世紀の中期以降、連邦最高裁判所によって多くの判例が積み重ねられてきた。これらの判例をその歴史的背景から考察して、各々の判事の意見を分析した。結果として、裁判管轄権訴訟の歴史は米国史に連動しているという考えに至った。

開拓民問題、大恐慌の影響を受けた訴訟、社員の社会保険料訴訟、保険会社との訴訟、名誉棄損訴訟、離婚・別居、子の親権に関する訴訟、相続財産の争いに関する訴訟、株主代表訴訟に関する訴訟、最も重要な影響を受けたのが製造物責任訴訟であり、欠陥製品を製造した会社に対しての裁判管轄権が現在も継続している最も重要な争点となっている。

このように、これらの訴訟は米国史における変換点において生じている。特に二つの重要判決であるペノイヤー判決は南北戦争終了後の 1877 年、もうひとつのインターナショナル・シュー判決は 1945 年である。

また、本書においてはトクヴィル「アメリカのデモクラシー」を多く引用した。トクヴィルは連邦制度に関して極めて洞察力のある見解を述べており、現在においても、まったく陳腐化していない。アメリカ、またはアメリカ法を学ぶ者にとっての必読書としていまさらながら推奨したい。

国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　河原田有一

訂正　「季報」No.106 の 8 頁、本文 2 行目の「警察」は、正しくは「検察」です。訂正いたします。

編集後記

「季報」107 号をお届けします。
ご執筆いただきました諸先生にまず厚く御礼申し上げます。
本号は年度末の号であり、退職される先生方からもお言葉をいただきました。また、来る新年度を迎えるにあたり、恒例の「新入生にお薦めの本」にて、書籍を紹介いただきました。（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 107 号
発行日　2020 年 3 月 20 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333